

過程とその時代的特質を卒論の課題としたのである。これはまさに「自分探しの歴史学」とでもいうべきものであった。

爾来私は、上記の「研究」の面白さにとりつかれ、結局数年間にわたり、この問題を追いつけた。たとえば学部卒業論文では、殷周時代（紀元前十一世紀頃～紀元前三世紀頃）の寶貝（＝子安貝）を主題として取り上げた。寶貝とは熱帯・亜熱帯の海域に棲息する巻貝の一種で、一般に中国最古の「貨幣」とされている。しかし卒業論文では、殷周時代の史料を精読した結果、殷周寶貝が当時の上層階級の人びとのあいだで取り交わされる贈与交換品であり、むしろ「生命と再生のシンボル」として、貨幣とは別の存在意義を有していたことを検証した。また修士論文では、殷周時代に続く戦国秦漢時代における貨幣経済の展開過程とその時代的特質について検討した。さらに博士論文では、以上の研究成果を集成し、より広い視野のもとで中国古代貨幣経済史全体の時代的特質を論じた。その一成

果は、拙著『中国古代貨幣経済史研究』（汲古書院、二〇一一年）として刊行済である。

このように私は、これまで一貫して中国古代貨幣経済史について研究してきたが、それでは逆に、すべての人間社会は本当に貨幣を媒介とした人間同士のコミュニケーション（＝貨幣経済）によってのみ成り立っているのか。結論からいえば、そうではない。たとえば、貨幣経済の顕著に発展している現代においてさえ、「世の中はお金ではない」と考えている人は少なからず存在する。そして彼らは時に、贈与（御中元やクリスマスプレゼント等）に基づくコミュニケーションを行なっている。では、これらの貨幣や贈与といった各種各様のコミュニケーションは一体相互にどのような関係しているのか。そもそも各地域・時代の歴史が諸々のコミュニケーションによって成り立っている以上、歴史を解明する場合には、それら諸コミュニケーション全体を解明する必要がある。かくて私は現在、

中国古代史を例として、「コミュニケーション・ヒストリー」の構築を目指している。これは同時に、「よりよい未来＝よりよいコミュニケーション」のあり方を模索するための参考資料を提供するという現代的な目的も持っている。

ともあれ以上の個人的な経験談をふまえ、専修進級時の皆さんに向けて、私がとくに強調したいのは、①留学の重要性、②歴史学以外の関連諸科学をもふまえた広い視野に基づく歴史研究の重要性の二点である。これらが皆さんの専修進級および、その後の学生生活の一助となれば幸いである。

楔形文字に出会って

中山 八歩

一 いきなり、つまづいた！

現在、私は大学院の西洋史学専攻で古代メソポタミア史を研究しております。そもそも西洋史専修に進む気はありませんでし

た。小学生の頃メキシコに住んでいたこともあり、古代マヤ・アステカ文明や中国古代史に関心を抱いていました。早稲田大学に進学したとき、考古学もしくは中国史を研究しようと考え、第二外国語に中国語を選択しました。ところが専修進級で考古学の選から漏れ、東洋史は二次募集をしていなかったなので、やむなく西洋史に進みました。興味関心もなく、中国語が役立ちそうにない西洋史で何をするか大いに悩みました。第一のつまづきです。

このように落胆した状況下で古代メソポタミア史の授業を受講しましたが、古代メソポタミア文明は「四大文明」の一つであり、楔形文字を使った世界最古の都市文明というイメージしかありませんでした。ところが、楔形文字の現存資料は数十万枚にも及び、現代に通じる高度で複雑な社会が存在することを知りました。

卒業論文では、前三千年紀後半のアカド王朝四代目の王ナラム・シンによる軍事遠征を扱うことにしました。従来、この王

朝の創始者サルゴンがメソポタミアの王として初めてシリアまで軍事遠征を行い、世界史上初の大帝國を建設したと言われていました。しかしサルゴンとナラム・シンそれぞれの残した碑文の内容と出土範囲を精査すると、サルゴンはシリアまで軍事遠征したとは主張していないばかりでなく、碑文の出土範囲は王朝の本拠地のイラク南部に集中し、シリアでは一切出土していませんでした。一方、ナラム・シンはいくつかの碑文でシリアへの軍事遠征を詳述するとともに、碑文の出土範囲はイラク南部からティグリス川を北上し、トルコ・シリアに至る広範囲なものでした。これらのことから、サルゴンではなくナラム・シンこそが、メソポタミアの王として初めてシリアまで軍事遠征を行ったと考えました。かくして、常識とされる知識が本当に正しいのかと考え、資料に対して現代の我々が多様な視点から問いかけることで、資料からさまざまなことが浮かび上がってくる楽しさを体験できました。

卒業論文の段階では、まだ楔形文字も読めず、当時のシュメール語やアカド語なども分からなかったため、現代の研究者による翻訳を利用するしかありませんでした。そして、分からないことが面白い、もっと研究したいという（誤った？）考えが自分の中に生まれ、大学院に進学することになったのです。

二 また、つまづいた！

多くの大学院進学者は卒業論文のテーマを発展・深化させていくものですが、私は卒業論文のテーマに行きづまりを感じていたため、新たにテーマを探すことになりました。第二のつまづきです。

テーマの選択に悩んでいたおりに教えていただいたのが、ハンムラビ法典を制定したハンムラビが残した大量の行政書簡の存在です。これらの行政書簡は、ハンムラビから、彼が新たに獲得した占領地へ代りに派遣した行政官僚団へ送った指令書です。その内容は多岐に渡るのですが、ハンムラビ法典の条文などと比較検討すると、ハン

ムラビが目指した支配体制がどのようなものであったのかが見えてきます。実は、ハムムラビ以前の社会では、王宮や神殿などの公的な組織が経済の中心を担っていました。ところが、ハムムラビが活躍する頃になると、民間の経済活動が経済の中で重要度を増していました。やがて、王宮や神殿による経済のコントロールが難しくなり、経済的に困窮するものが多数出てくるようになっていました。ハムムラビは民間の経済活動を巧みにコントロール下へ組み入れ、王宮や神殿などの公的組織を支える人々を保護することで、支配体制ひいては社会の安定を目指したと見られます。そこで研究テーマを、ハムムラビが支配領域内の土地（王領地や、役人や兵隊、職人などに給付した土地など）の経営を通して、どのような支配体制を敷こうとしていたのか考察することにしました。というのは、ハムムラビが導入した支配体制が、後世の支配体制に影響を与えたと考えられ、その支配体制を研究することはメソポタミア史に

とって重要な意義をもつと考えるからです。

三 もし、つまづいたら…

思えば、自分の思い通りに物事が運んだ例はほとんどありません。専修進級されるみなさんの中にも、希望が叶わない方も出てくると思います。「挫折の先輩」として励ましの言葉を差し上げるとするならば、出会いを大切にしてほしいということですね。きつと、みなさんに合うものがあり、それを逃さないでほしいのです。私は幸い（不幸？）にも楔形文字と出会うことで、大学生活が充実したものとなりました。資料と向き合うことで、自分なりの歴史観や歴史像を構築することができると楽しみを見出し、楔形文字資料を通してそれが可能であると信じています。

私と日本考古学

青木 弘

考古学を始めるきっかけは、父が歴史好

きで兄も人間科学部で考古学や民俗学を専攻していた影響をうけつつ、高校生の頃に、奈良県キトラ古墳彩色壁画の新聞記事を読んだことになった。色鮮やかな朱雀像は私を歴史へと誘い、気になる記事を切り抜き、兄から大学で学ぶ内容を聞き、休みには一緒に国立歴史博物館を一日中歩くというささやかな始まりであった。大学で考古学を中心に勉強したかった私は、日本考古学協会のホームページから各大学で開講している講座の情報を得て受験校を選択し、早稲田大学に入学した。

二〇〇四年に早稲田大学第一文学部に入学した私は、大学での講義とともに、サークルでも考古学を経験したかったので「早稲田大学考古学研究会」に入会した。この入会がコース進級以前の一年坊主の私が考古学を体験できる大きな機会であった。

サークルでは机上での勉強会から、各地の遺跡や博物館見学、そして先生や先輩との懇親会など数多くの機会に恵まれた。何よりも得がたい機会だったのは、発掘踏査